

曾孟樸の修学

樽本照雄

失恋の後

祖母丁氏の遠い親戚である女性（丁氏二表姐，以下Tという）との恋愛が失敗に終わった曾孟樸は，彼自身の言葉でいうと，「私はこれより歩む道がなくなった。放蕩という方法で煩悶を自ら解き放つよりしかたがなかった。……おおよそ私の肉欲をほしいままに出来る場所では……私はやらないことはひとつもなかった……」¹⁾ という自虐的な行動を取るにいたった。その放蕩の終末は，意気消沈である。

後に私とTとの婚姻問題がもう絶望的になると，私は長く病み，精神は極めて意気消沈してしまった。この種の行為（注：放蕩のこと）も起こしはしなかった。しかし，終日ため息をつき，憂うつな時間を過していた。父は当時北京にいたが，私が本当の禍をひき起こすのを恐れ，私を北京に行かせ郷試に受験させるようにした。²⁾

孟樸の日記に言う，上京の目的は「郷試に受験させる」云々というのは，彼の記憶違いであろう。常熟出身の孟樸が受けるべき郷試は，北京ではなく南京

1) 兒子虚白未定稿「曾孟樸先生年譜」『宇宙風』第2期1935.10. 1 初出。今，魏紹昌編『孽海花資料』（北京中華書局1962. 4）による。153頁。以下，虚白「年譜」，『資料』と略す。

2) 東亜病夫「病夫日記」1928. 5.25付。『宇宙風』第2期114頁。『清末小説研究』第2号にも収録。

であるからだ。それはさておき、父親が恐れたのは、孟樸の自殺であるらしい。「私が本当の禍をひき起こすのを恐れ」という個所に、それがうかがわれよう。

放蕩と意気消沈の時期は、ほぼ1年間続いたものと思われる。『魯男子』の「二十四秘密」に次のような記述がある。「彼は、それまでの暖かくやさしいよき夢が、すでに運命の神によって粉々に砕かれたと感じた。一年来の気遣いじみた猛烈な熱気も慈愛の風によってしずめられ、今、残っているのはただ失望、悔恨、慚愧だけであった³⁾」というのがそれだ。夢が粉々に砕かれたとは恋愛の失敗を、気遣いじみた熱気というのは放蕩を、慈愛の風とは、父親の配慮のことをそれぞれ指している。

恋愛の失敗は、ふたつの点で孟樸にとって大きな意味を持つ。ひとつは、唯一最大の保護者としての父の存在が孟樸に強く意識されたこと。もうひとつは、恋愛に向けられていた情熱がその不成就により、そのまま学問研究にふり向けられることになったことだ。

Tとの別離が、父親の反対によるものならば、孟樸にとって父親は願望を挫折させた張本人として憎悪、打倒の対象、また精神的に超えられるべきものとして認識されてもいいはずだ。ところが、この恋愛を作品化した『魯男子』を読む限り、そんな様子は微塵もなく、あくまでも息子の恋愛を支持し、相手の親とのこじれた関係を何とかほぐそうと努力する父親が描かれるのみである。恋を邪魔する敵対者ではなく、成就を援助する保護者なのである。

台湾世界書局版『魯男子』にはなぜか未収録の第2部「婚」の「二観風」に、「全世界で彼（注：魯男子）を愛する者で、父親より真摯なものはいない。彼はすでに残忍にも恋人の懐から無理矢理離れ、父親のふところに跳びこんだのだった。彼はこの時全人生を父親の手にゆだねており、水中に捨てられようと、火中に置かれようと父のなすがまま、すべては甘い授与なのであって、いわんやこのように完全な平穏な状態ではなさらでであった⁴⁾」という個所があるが、孟樸と父の関係をあますところなく伝えている。

学問への情熱の転化は、同じく『魯男子』第2部「婚」に述べられている。

3) 曾樸『魯男子』下冊 台湾世界書局1959. 8. 354頁。

4) 『真美善』第5巻第2号 1929.12.16 所載。

初恋による手ひどい傷を受けた魯男子だったが、彼の弾力性のある熱情はどうしてちぢこまり、うつろになることに甘んじていよう。ほどなく、重圧のもとでまた頭を出したのだった。彼はどこに熱情を向けたのか。恋愛の場は、彼はおくびょう鳥になってしまっていて、二度とツメにも触る勇氣はなく、方向を変え書物の世界に逃げ込み、眼前の平穩を探し求めるだけだった。⁵⁾

彼はそれ以来、彼のたぎる心を寄せたいと思う対象をまったく失ってしまった。以前からの書籍のほかには、その盛んに燃えるカマドを受け入れる場所はないと、彼ははっきりと理解した。だが、小さい頃から愛読した詩歌小説、情感に訴える著作はきれいさっぱり捨ててしまい、彼が日夜抱擁し、なでさすり、寸歩も離れず、恋人のように夢中になったのは、驚いたことに小学、地理、目録、校勘、輯佚というあれら乾燥し苦渋に満ちた純理知的な仕事であった。ある時は、従来軽蔑していた八股文、受験用の詩すらもついでに練習し、文学少年の本分を尽した。⁶⁾

孟樸の、小学、地理、目録、校勘、輯佚という、いささか漠然とした学問研究に対する興味に、あるひとつの方向を与える機会となったのが、息子の自殺を心配した父親の勧めによる北京行であった。

目録学の研究

全国の挙人のうち、挙人覆試を通過した者に対して北京で行なわれるのが会試であり、それは丑の年、辰の年、未の年、戌の年の三月に開催される決まりである。⁷⁾

孟樸の父君表は、会試の年になると上京し受験するのを繰り返していた。ち

5) 4) に同じ。

6) 4) に同じ。

7) 科挙については、宮崎市定『科挙』秋田屋 1946.10.20 および同じく『科挙』中公新書 1963. 5.25 を参照した。

ょうど会試受験のために北京滞在中であった父に、樸孟は上京を勧められたことになる。己丑、光緒15年（1889）、孟樸18歳の時だ。

同年秋、学校試の第1段階である県試に応募するための受験準備に南下帰京するまで、孟樸は常昭館に滞在し、⁸⁾ 5、6カ月を北京で過ごした。

上京の際同行した友人張隱南らと、グループで遊び歩いたりしたらしい。⁹⁾

『魯男子』で重要な役割りをはたす阿林のモデルとなった女性林杏春に会ったのも、この北京滞在中であった。ある日の夕方、散歩に出かけようとする向かいの大邸宅から15、6歳の垂れ髪の少女が出てきた。当時、Tのおもかげが孟樸の頭からは去りがたく、容貌のよい少女を見かけるとどうしてもTに似ていると思ってしまう。彼女の方も長く見つめられているのに気が付く。目と目が合い、お互いにしばらく見つめあい、それがきっかけとなって3日目の夜、言葉を交わすようになった。2度目に上京したおり、彼女を訪ねてみると前年に肺病で死んでいた、という回憶である。¹⁰⁾

孟樸にとって在京一番の収穫というのは、何といても彼が以前から彼なりに考えていた目錄学の研究方法に一応の自信を得たことだった。

目錄学の方法にふたつある。ひとつは、後漢の班固の『漢書藝文志』のように過去からその時代までの典籍を網羅するやり方であり、他のひとつは、宋の孝王の『墳籍志』に始まった、その時代のみの著述を記録するものだ。それぞれに長短がある。唐の劉知幾は班固の方法を、古今が錯雑として断代史の体裁を失っていると批判し、孝王の方法にならうべきだとした。一方、清朝の史学家は多く班固のやり方に賛同し、そうでなければ古書存亡の迹がなくなってしまうと考えた。そこで孟樸の方法というのは、劉の主張に従いその時代のみの藝文志を作りつつ、前史の及ばぬところを補っていくやり方で、長らくこの考えを暖めていたらしい。

光緒己丑（1889）の年、京師に遊び当代の通人で補晋書藝文志および南

8) 2) に同じ。

9) 張隱南「籀齋先生哀辭」『琴報』1935（初出未見）。『資料』182—185頁。

10) 2) に同じ。

北史芸文志をなす者があるのを聞いた。その体裁をたずねるとことごとく劉氏に依っており、自分が考えていたことが誤っていなかったことをはなはだ喜んだ。¹¹⁾

孟樸は後漢書の芸文志を作ることにし、受験の余暇を利用しながら、翌1890年春より関係書籍収集に着手した。後漢書に対してすでに作製されていたいくつかの補芸文志を参照した上で、1891年より執筆を開始し、補志1巻・考証10巻という大著が完成するのは6年後の光緒21年(1895)六月十五日の事である。孟樸の仕事の内容を知るためにも、ここで神田喜一郎「曾樸の補後漢書芸文志考に就いて」から引用させてもらう。

然るに此の曾氏の書を読むに、著者は目録学に就いて確に一隻眼を具へてゐたらしく、其書の出来栄は決して錢・侯・顧・姚の四氏の下にあるものではない。殊に錢・侯・顧・姚四氏の書が単なる典籍の目録であるか、或はそれに多少の考証を附してゐるかに過ぎないのに対し、曾氏の書が詳密なる考証を十巻も書いてゐるのは大いに注目し得る。然かも其の考証が清朝に於ける目録学上の名著と称せられる章宗源の隋書經籍志考証と比較して、殆ど雁行するに足るものなることを思はしめるに於ては到底之を看過することが出来ないのである。¹²⁾

其の考証の博引旁証たることは偏に吾人をして心服せしむるのであつて、殊に自己の案語の中に章宗源の隋書經籍志考証の如く、多く古書の佚文を録してゐるのは大に著者の労を思はしめるのである。吾人を以て見れば蓋

11) 曾樸「補後漢書芸文志并考自序」『二十五史補編』第2冊 北京中華書局 2447頁。

12) 神田喜一郎「曾樸の補後漢書芸文志考に就いて」『泊園書院学会会報』第2号 1922. 6. 24—25頁。当論文では孟樸の姓「曾」をすべて「曹」と誤っている。引用では訂正しておく。その誤りからもわかるように、補後漢書芸文志考の曾樸が『孽海花』の曾樸と同一人物であることに当時著者は気が付かなかつたようだ。「然るに此の曾樸といふ人は如何なる経歴の人であるか、寡聞なる吾人は未だ之を知らない。意ふに光緒二十一年に此書を成就したといふのであるから、或は尚ほ世に存する篤学の士であるかとも想像せられるのである」とも書かれている。

し其の功績たるや、章宗源と相伍して差がないものであらう。それに著者の凡例に拠ると、此等の作文を諸種の類書から引用するに、例へば芸文類聚なれば胡纘宗所刊の小字本を用ひ、白孔六帖なれば華北宋刊本を用ひ、太平御覧なれば鮑刻本を用ふといふ風に、著者として出来得る限り善本に拠つたといふから、其の用意周到の程も知れやう。唯だ最後の道仏志の考証に至つては、多少遺憾な点もないではないが、兎も角全体として、其の考証は立派なものである。¹³⁾

受験の余暇を利用しての執筆とはいいいながら、一事に徹底して熱中する孟樸の性格がここでも発揮された。『魯男子』で、日も暮れかかったある時、公明が魯男子の書齋にはいってみると、日の光と夜の交錯する影の中に埋もれた魯男子が、両側を書棚にはさまれ、足元には本を散らかしたまま、椅子の背には用済みの書籍がつっこまれ、開いたままの、半分巻いたままの、ちょうど参考にしてある本等に押しつぶされそうになって、その中でのおずかな空間に、本をひろげ、頭をさげ、筆を握り、一字一字こまかく校勘をしている、父親がそばにいるのに気がつかない、といった様子が描写されている。公明のセリフ、「やれやれ！ お前は何をするにも度を過ぎす（原文：過分）。遊ぶといえば人を心配させるし、勉強するといえはまた人を恐れさせる」¹⁴⁾に見られる、「度を過ぎす」という言葉ほど孟樸の性格を言い当てたものはないだろう。

受 験 と 結 婚

光緒16年(1890)から光緒18年(1892)までの3年間は、孟樸にとって多忙の年であった。

科学の子備試験ともいべき童試受験と並行して初めての結婚をしたのが光緒16年(1890)、孟樸19歳の年だった。翌年八月には南京での郷試があり、その合格の喜びもつかの間、出産直後の妻とその女兒を失い、続く光緒18年

13) 同上。30頁。

14) 4) に同じ。

(1892)三月、北京での会試に参加するという具合に、3年連続の受験と身边に生じた結婚、生と死、それに加えて余暇を見つけての「補後漢書芸文志并考」の執筆があった。

1. 童試と結婚

童試の第1段階である県試では第1番で合格、1ヵ月後の府試では第2番を得る。次の院試まで3ヵ月の余裕があり、¹⁵⁾ その間に孟樸は結婚をした。相手は、父君表の親しい友人、同治4年(1865)の進士汪鳴鑾(柳門)の三女汪珊円¹⁶⁾である。同治7年(1868)の進士呉大徴(清卿)が媒酌した。

『魯男子』第1部「恋」では、「近頃、父母の命、媒酌の言により別に婚約をしてしまった」¹⁷⁾「このたび父親の主張する唐氏との婚事は、私(注：魯男子)はボンヤリと人のなすがままにさせてしまった」¹⁸⁾と表現されている。親からの押し付けられた結婚だから、それに徹底して抵抗したというようなことはない。ただ、抵抗のポーズを示しただけだった。虚白の「年譜」に結婚当時の模様が次のように書かれている。

孟樸先生は宗法の観念に束縛されており、鋳型にはめられるのを望みはしなかったがそうせざるを得ず、そこで結婚の日、ただ痛飲し酔ったことを口実についに床入りをしなかった。しかし、新婦は十分に柔順で、彼女のおだやかな行きとどきと誠実な慰撫にはどうしようもなく、また孟樸先生も結局のところ彼女に対して何の恨みがあるわけではなく、どうして憐れむ気持ちが生じないことがあろうか。半月もならずして若い夫妻は異常に仲好くなった。¹⁹⁾

15) 李培徳著／陳孟堅訳『曾孟樸的文学旅程』台湾伝記文学出版社1977. 8. 1. 25頁。

16) 汪珊円としたのは、1928年7月5日付曾孟樸の日記(『宇宙風』第1期1935. 9. 16所収。『清末小説研究』第2号にも収録)にそうあるによる。虚白著の「年譜」には内珊とあり、李培徳もこれを踏襲する。『資料』は珊円と訂正している。

17) 3)に同じ。353頁。

18) 3)に同じ。371頁。

19) 虚白「年譜」。『資料』153—154頁。

Tとの恋愛で大騒動を引き起こしたばかりだったし、父親の命による北京滞在中もTを忘れかね、その面影を同年齢の女子に求めていた孟樸である。断ち切れぬTへの思いにあくまでも固執するためには、親の勧め婚事に反対してこそ孟樸の態度に一貫性が保持できる。ところが、孟樸にとって父とは唯一最大の保護者として存在しており、これに反対することなど到底できはしない。この矛盾を解決するために取ったのが、わずかに初夜に床入りをしない、という方法であった。床入りを拒否することにより孟樸自身の主体性を満足させ、新婦に責任はないと理由づけ、婚事自体には反対しないということで父親の意向をも充足させる、というわけだ。

結婚後、院試に第7番の成績で合格する。

2. 郷試と死別

光緒17年(1891)の半年間は、ふたたび北京ですごした。以下は虚白の「年譜」から。

この年の上半年、孟樸先生はまた北京に赴き、都の諸名士、たとえば李^{ママ}石農、文芸閣、江建霞、洪文卿らと交際し、《元史》、西北地理および金石考古の学をうちこんで研究した。その時、先生は20歳にすぎなかったが、しかしのみこみがすばやく、年長者達はみな引きつけられ若い友人とした。²⁰⁾

李文田(芍農、1834—95)は咸豊9年(1859)の進士、西北地理の学に詳しい人物であるし、文廷式(芸閣)は光緒16年(1890)の進士で翁同龢の門下にあった。洪鈞(文卿)の名があがっているが、孟樸と彼の交際はこの翌年、光緒18年(1892)であろう(後述)。この時、孟樸は「《元史》、西北地理および金石考古の学」を研究したと記述されるが、「補後漢書芸文志并考」の執筆準備に多忙のほずであり、その他の事をやる余裕が果してあったかどうか、わから

20) 同上。『資料』154頁。

ない。

諸名士との交際が可能であったのも、君表の息子であるということと、汪柳門の娘婿という事実が与かって力あったであろう。

郷試に応じるため、ふたたび南下帰郷する。孟樸の新夫人はすでに懐妊数ヵ月であった。八月、郷試は南京で開催され、父君表が孟樸に同行した。常熟から南京までの船中で、孟樸は突然、嘔吐、下痢をとともなう発熱をおこし、起きあがることもできそうにない状態になったが、医術の心得のある父の処方でなんとか試験を済ませた。九月に発表があり、第101番で合格する。

虚白に従うと、この成績順位には裏話がある。南京郷試の主考官は金保泰（忠甫）、副考官は代々曾家と交際のあった²¹李盛鐸（木齋）であった。その李盛鐸が孟樸に語ったことによると、孟樸の答案の出来があまりにもすばらしく、原籍・年齢を糊ではりつけて封じてあるのを剝がしてみると年齢が17歳とある。若僧に書けるような文章ではないから、てっきり替え玉に違いない、不合格にしよう、と金保泰が主張するのを、すぐれたものを取りこぼし、よい弟子を失わぬようにという李の説得で不合格は免れたものの、最初の第17番から第101番に移されてしまった、ということだ。

当時20歳の孟樸が、年齢を17歳と偽ったのは、受験の機会をそれだけ多く得たいという気持ちからだっただろうが、かえってそれが裏目に出てしまった。偽りの年齢は、この試験の時ばかりではなく後になっても使用されており、孟樸自身も少々混乱しているれように思われる。曾虚白氏より提供された数枚の孟樸の写真（『清末小説研究』第2号巻頭所載）に、孟樸自筆の説明文が記されているが、その1枚目には「光緒21年（本当は18年）21歳」とあり、2枚目には「光緒26年（本当は24年）27歳」と書いているのがそれだ。2、3歳実際より若く言っている。

八股文の修得に熱心でなく父にしかられていた孟樸であったが、替え玉と間違えられそうになるほど答案の出来がすばらしいとは、見違えるばかりの変わり様である。

21) 李盛鐸が曾家と代々交際があったことは、李培徳『曾孟樸の文学旅程』26頁による。

黄炎培（1878—1965）に「紀念曾樸」という文章がある。

私が14歳の時、ちょうど八股を学んでいたが、突然江南の郷試に第2番で合格した曾樸の硃巻が送られて来た。(中略)その八股文は、典雅に、流暢に、また立派で堂々としており、まことに愛すべきであった。これより私の頭の中には曾樸という人物が住みつき、仰ぎみて到達できぬ存在に思えた。²²⁾

黄炎培14歳の時というのは、まさに光緒17年（1891）の郷試を指す。八股文の模範文とされるほど出来がよかったことがわかるが、ただ、黄の言う郷試の第2番という点が虚白の記述と異なる。

郷試の採点方法は、不正を防止するためにいろいろ工夫がされており複雑である。墨で書かれた答案の筆蹟から特定の人物が判明するのを防ぐため、答案の全部はいったん写字係によって朱筆で写し取られる。これを硃巻（朱筆騰写答案）という。この硃巻を審査員が採点するわけだ。合格者の答案は北京に送り出される。成績が1番から10番までの答案の硃巻は天覧に供するために特別の包みにして送られるということだから、黄の言うように孟樸の成績が2番であれば、その硃巻は北京に送られているはずで、黄が入手出来るのはおかしくなる。経緯の詳細は、わからない。

挙人となった孟樸の喜びも束の間、大きな不幸が彼を襲った。

十一月、珊円は女兒を出産したが、4日後容態が変わり、半月ならずして夫人は死亡、女兒も2ヵ月足らずで夭折してしまったのだ。

先生は情感の最も濃い人であり、どうしてこのような打撃に耐えられようか。このためガッカリしてしまい、また頽廢の道に入ってしまった。この時期、先生の作品には第2詩集『羌無集』および『雪曇夢院本』4巻がある。後者は、まったく珊円夫人の死を記念した作品である。²³⁾

22) 黄炎培「紀念曾樸」『宇宙風』第2期 1935.10. 1. 103頁。

23) 虚白「年譜」。『資料』155頁。

『雪曇夢院本』は崑曲体の脚本で、1931年自らの経営する上海真美善書店より発行された。私は該本未見である。『真美善』第7巻第3号(1931. 1. 16)に掲載された広告「曾樸全集兩大預約」(曾樸の詩文・小説・考証・戯劇等35種を出版する計画で、まずユゴー著『九十三年』と『雪曇夢院本』を同年4月に出版するというもの)に該書が紹介されているが内容の詳細はわからない。わからないが、参考までに広告を訳しておく。

青年
作品 雪曇夢院本 本書は曾樸青年時の熱情あふるる表現である。最も美麗な字句、最も美しく澄んだ音調で、彼の最も真摯な気持ちを表わしている。本書中の悲歎離合で、読者の心の深層を打たず、種々の味わい深い反応を人に起こさせぬ個所はひとつもない。全書は10万語余り、精裝定価1元3角、平裝定価6角。預約価精裝7角8分、平裝3角6分。

30年後、孟樸が父親の墓参りに行った事を日記に書いている。珊円についても触れているのであわせて紹介しておきたい。

常熟にもどった翌日、父親の墓参りに宝巖に船をやった。2年余り来ていない。墓守りは、白髪で皮膚はシワより骨が浮き出て、容貌はおそろしい。もし私に声をかけなかったら、ほとんど彼と気がつかなかっただろう。墓のすべては、まあまあであったが、ただ真ん中の塚が土が少々崩れており、冬になったら修理しなければならない。珊円の墓は、しかしまだ完璧だ。墓掃除をしている時、各人の容貌を心に思い浮かべていた。父の声、笑顔がまるで目前にあるようだったが、珊円の顔はどうしたことか思い出すことが出来ず、自分でもなぜかわからない。ともに過した日があまりにも短く、脳に深く刻みこまれなかったというわけでもあるまいが。しかし、臨終の惨状に思い至るや、心中耐えがたくなり、涙がボウダと流れるのをこらえることが出来なかった。(1928. 7. 5 付日記)²⁴⁾

24) 2)と同じ。『宇宙風』第1期。20—21頁。

孟樸と珊円の生活は、およそ1年半であった。翁同龢の日記（光緒17年十二月二十七日）に、「汪柳門がやって来て長話しをする。おりしも彼は娘、即ち曾孟樸の夫人、を失う」²⁵⁾という記述が見られる。

3. 会試の失敗

会試は、郷試の翌年三月に北京で挙行される。会試に先立つ約1ヵ月前、二月十五日には挙人覆試が行なわれ新旧挙人はこれに応じなければならない。李培徳によれば、正月十日までに北京に到着していなければならないという。²⁶⁾ そうすると、虚白が「年譜」で孟樸が上海から上京したのは「春の初め」と述べているが、まったく正月早々ということになるろうか。

十一月に夫人を失い、女兒も2ヵ月足らず²⁷⁾でなくなっている。孟樸の上京は、女兒の命が助かるかどうかといった非常に微妙な時期ではなかったか。いくら会試という重要な試験であるとはいえ、また、この機会を逃すと次回まで3年待たなくてはならないとはいえ、夫人を失った直後の、加えて子供がどうなるかわからない時期の孟樸に受験を強要する方が無理というものであろう。人一倍感じやすい心を持った孟樸にとってはなおさらのことである。ところが、童試にも郷試にも連続して合格したのだから会試にも必ず上位の成績で合格するだろう、この機会を逃してはならぬと父親をはじめ、家族、父の友人より強く受験を勧められた。君表は、気のすすまぬ孟樸に再三迫り、旅支度をさせ、わざわざ自ら上海まで付き添い、孟樸が汽船に乗ったのを見届けてやっと安心したという。²⁸⁾

『魯男子』では、君表をモデルにした公明は挙人になった後、7, 8度会試に応じたことになっている。もし君表がこの度の会試に孟樸と一緒に受験していれば君表にとって6度目の挑戦になっていたはずだ。しかし、父子が同時に受

25) 『翁文恭公日記』上海商務印書館 1925. 7.

26) 李培徳『曾孟樸的文学旅程』28頁。

27) 虚白「年譜」の初出では「没有幾月（数カ月にもならず）」とあるが、『資料』では「未及兩月」と訂正されている。

28) 虚白「年譜」。『資料』155—156頁。

験したとは書かれていない。虚白の記述によると、君表は故郷常熟に留まっている。なぜ君表が会試に応じなかったのか、その理由はわからない。

光緒18年壬辰の会試は、主考官翁同龢のもとにとり行なわれた。²⁹⁾ 翁が張謇(季直1853—1926)を首席で合格させようとしたところ、誤って劉可毅を合格させてしまったことでこの会試は有名であるらしい。³⁰⁾ ちょうど同じ事が孟樸にも起こっている。出来のいい答案があるので、これこそは曾樸のものに違いない、と翁が叫んだところ、あにはからんやそれは黄謙齋のものであり、孟樸の答案は墨で汚されていたため事前にはねられて藍榜に登せられていたというのだ。

藍榜とは、答案の形式上の規則違反、たとえば、ページをとばして書き続けたり、まったくの白紙で提出したり、ローソク或はランプの油などで汚したり、誤字を訂正するのに紙をはったりする事等が発見されると、その受験生の姓名を場外に告示し、以後の試験を受けさせないようにする、その告示のことをいう。³¹⁾

なぜ答案が墨で汚されたのか。その経緯を孟樸は当時、次のように説明した。孟樸が試験場に入ると突然咯血症を生じ、雲南の何という人がまめまめしく人参を煎じてくれたりしたが、思わず何の袖口が板をひっくりかえし墨汁が全部答案にかかってしまったという。突然の病気を理由にしたわけだ。しかし、後に孟樸が三人称で書いた伝記体の回憶録『象記』では、この事件について、「咯血病とか、雲南の何という人が人参湯を送ってくれたとか、袖口で墨壺をひっくりかえしたとか、すべては嘘っぱちで、病夫先生の虚言であり、彼の一時の気ままと理由のない情感の衝撃をおおい隠すためのものであった」³²⁾と述

29) この会試で孟樸の岳父汪柳門が大総裁になる希望を持っていたが、孟樸が受験する関係で汪は休暇をとり、翁が大総裁になったと虚白は「年譜」で言っている。これに対して、汪は順序からいって副総裁にしかなれない、という徐一士による疑議が提出されている。徐一士「読『曾孟樸先生年譜』」『国聞週報』第12巻第40期1935. 10. 14。

30) 同上。

31) 宮崎市定、旧版『科挙』125頁、新書版78頁。

32) 『大晩報』「火炬」副刊1935. 6. 29—30(初出未見)。今、虚白「年譜」、『資料』156頁による。

べている。どうやら、墨で答案を汚したのは孟樸自身が故意に行なったというのが事実であった。

それはそうであろう。夫人を失ったばかりで残された女兒の生命がどうなるかわからないという時期に、無理矢理受験を強要されたのだ。孟樸はもともとヤル気を喪失していた。しかし、それでは父親の期待に背くことになる。しかたなく、いやいやながら受験し、その結果が「気ままと理由のない情感の衝撃」から故意に答案を墨で汚してしまう事になってしまった。とてもありのままに話す勇気がなく、父親には咯血病などという病気をでっちあげたというわけ。君表の方も事情はわかっていたらしく、ただちに内閣中書の官位を金で買い、手紙で孟樸に南下する必要はなく、北京で奉職するようにと知らせた。藍榜に登せられると処罰として以後何回かの受験停止を申しわたされる。君表にしてみれば、孟樸を次回の会試まで待たせるわけにもいかず、官位を買わざるを得なかったとも言えよう。

孟樸の会試放棄というのは、あくまでも「気ままと理由のない情感の衝撃」からであり、科挙そのものに対する思想上の反対があったからではない。この点は、注目しておく必要がある。

賽金花との出会い

北京では汪柳門の南池子の家に寄寓し、趙劍秋（椿年）、翁又申（燭孫）らと長安街を馬でサッソウと行き来し得意になっていた。白馬にまたがり、弁髪姿で手にムチを持った孟樸の写真（『清末小説研究』第2号1978）が当時の模様を想像させる。

孟樸が洪鈞の第3夫人賽金花に出会ったのも、ちょうどこの時期である。

孟樸は当時を回憶して、「私は北京で初めて賽を知った。当時私は内閣中書に任じており、いつも洪宅に出入りしていたのでよく出会ったのだ」³³⁾ と言っている。孟樸と賽金花の出会った時期を推定するのに文中の「内閣中書に任じ

33) 崔万秋「東亜病夫自述与賽金花之関係」『時事新報』1934. 11. 25—26（初出未見）。『資料』140頁。

ており」という言葉が決め手となる。さきに、前年の上半年、孟樸が北京で李文田、文廷式、江建霞らの名士と交遊したと述べたおり、洪鈞の名前が出ていることに対して疑問を提出しておいたのは、孟樸のこの証言があったからだ。前年すでに洪鈞に会っているならば、当然賽金花とも知り合っていなければならない。ところが、その時点では孟樸は内閣中書はおろか郷試すらも受験してはいないのだ。故に、内閣中書という官位に重点を置くならば、孟樸と賽金花の出会いは、光緒18年(1892)となる。

孟樸が会った頃の、洪鈞の第三夫人である彼女を賽金花と呼ぶのは、厳密に言うとは正確ではない。

彼女は姓を趙、幼名は彩雲という。境遇の転変に従い、富彩雲(傅彩雲と誤り伝えられる)→夢鸞→曹夢蘭→賽金花→魏趙靈飛と改名をかさね、その他賽二爺、三宝、鈺蓮などと呼ばれたこともあった。賽金花と名乗るのは光緒24年(1898)からである。夢鸞というのが洪家に嫁いってから洪自身が彼女につけた名前であるから(賽自身の言葉による)、孟樸と出会った時点では、当然夢鸞となる。だが、本稿では便宜的によく知られている賽金花という名前を使用する。

賽金花との関係について、もう少し詳しく孟樸の証言を聞いてみよう。

賽金花は原籍が塩城であったが、彼女は蘇州であると自称していた。16歳で洪鈞に嫁いだ。洪、字は文卿、私の父の義兄であり、同時に試験上の師のまた師なので「太老師(注:大先生^{おおせんせい})」である。だから私は当時賽金花のことを「小太師母(注:大先生の若奥さん)」といつも呼んでいた。賽が洪文卿に嫁いだ時、年は16歳、私はわずかに13歳であり、どうして恋愛がいかなるものか理解できようか。(中略)『樊山詩集』中の「彩雲曲」では、彩雲が文卿に嫁いだ時16歳であるといっており、その年、私はわずかに13歳、たとえ1年ゆずったとしても多くて14歳である。どうして賽と知り合いかつ愛情の生じるような事がありえようか。私は北京で初めて賽を知った。当時私は内閣中書に任じており、いつも洪宅に出入りしていたのでよく出会ったのだ。当時、賽は表情がとてよく、目は活発でいきい

きして、たとえ、話をしなくてもまるで話しているような感じが目から伝わってきた。たとえば、同席して食事をするとして食卓に10人いれば、賽は手、目、口を使って10人ともにとっても愉快地満足させることが出来た。言いかえると、彼女はいかなる人に対しても決して寂しい思いをさせないのだった。賽は女神の容姿を具えた美人では、到底、ないが、ただ顔は整っていた。性格は小事に拘泥せず、人に会うといとも簡単になじみとなった。私が賽を知った時、彼女はおおよそ27、8歳で、刺繍した衣服を着、当時流行の髪を結っていたが、洪に随行して西欧に出使して帰って来た後のことである。³⁴⁾

そもそも、孟樸がなぜ約40年前の事を語るハメになったかといえ、1934年11月17日『申報』に「賽金花之一生」と題して北京にいた貧乏と病気にさいなまれる晩年の賽金花を報ずる記事が掲載されたからである。その記事に、孟樸が賽金花に失恋し、その怒りを晴らすため『孽海花』を書き、彼女と文卿を罵ったのだという意味の賽の発言があった。物好きな新聞記者が事の真偽をたしかめに孟樸を訪問し、上述の談話を得たという次第である。

ここでも引っ掛かるのは小さい事だが（またその小さな事の穿サクが大好きな今日このごろの私です）孟樸と賽金花の年齢だ。賽が洪に嫁いだのは、彼女が16歳の時で、孟樸は13歳という。ところが、賽が嫁いだ年、光緒13年(1887)は孟樸16歳というのが事実であり、彼自身誤っている。また、彼らが会ったのはそれから5年後の光緒18年(1892)だが、16歳で嫁いで5年後というと賽は21歳でなければならない。しかし、彼女は27、8歳であったと孟樸はいう。どうなっているのか。

孟樸の年齢の誤りは、郷試の受験の際3歳若く申告しているのが後年まで影響を及ぼしていると考えれば納得がいく。賽金花の場合は少々事情が異なり複雑である。彼女自ら言う生年が、その時どきでクルクル変わる。手元の資料だけでもいくつかある。

34) 同上。『資料』139—140頁。

1. 同治13年(1874) 劉半農初纂／商鴻遠纂就『賽金花本事』北平星雲堂書店 1934. 11
2. 光緒元年(1875) 曾繁『賽金花外伝』上海大光書局 1936. 10
3. 同治11年(1872) 竹内好訳補『賽金花』生活社 1942. 8. 15
4. 同治3年(1864) 冒鶴亭「孽海花閒話」(四)『古今』文史半月刊第45期 1944. 4. 16
5. 同治3年(1864) 瑜寿『賽金花故事編年』上海亦報社 1951. 5 影印版

1, 2ともに賽から直接聞いた生年である。3の竹内好のものは、賽が死の直前に今までふたつ年を欺いていたと告白した、という伝聞にもとづき1の生年に2歳を加えたもの。4の冒鶴亭の言うところによると、「私が彩雲を知ってから前後20余年、たったひとつだけ本当のことを得た。即ち、同治三年甲子に生まれたということである」³⁵⁾とあり、5の瑜寿は冒の文章を正しいと判定している。たしかに、冒のいう同治3年生説に従えば、孟樸が賽に会った光緒18年(1892)は彼女が29歳の時となり、孟樸のいう27, 8歳に近くなる。私も冒、瑜の考証が正しいと思う。それにしても、最も早いのは1864年、最も遅いのは1875年とその差11年もの開きがあるというのは尋常ではないようにも思われる。しかし、賽としては姦女という事もあり年を若く言いたい。また表情が若く見られる傾向があったことが相重なって生年がどんどんズレていった、自分で若く言っているうちに自身もそんな気になって疑問を感じなくなった、ということではなかろうか。

賽金花は同治3年(1864)、蘇州に生まれた。原籍は安徽休寧県(孟樸によると塩城)である。家は代々の質屋であった(と賽はいう)が、太平天国の乱にあたり一家四散した父は、蘇州で質屋を営んでいた祖父を訪ね、当地で潘氏と結婚し賽が生まれる。賽の生まれた頃より家庭は困窮のどん底で、父は時節柄職業もなく、短期間水くみ人夫、かごかきなどをやって糊口をしのぐといわば

35) 冒鶴亭「孽海花閒話」(4)『古今』文史半月刊第45期 1944. 4. 16

都市貧民階層であった。比較的長期間、蘇州で妓女生活をおくっていたが、正式に妓女と認められ富彩雲と名乗ったのは光緒12年（1886）23歳の時である。たまたま蘇州にもどっていて母の死に会い喪に服していた洪鈞は、同年、賽を見染め、翌光緒13年（1887）正月十四日、彼女を娶ると、四月喪のあけるのを待って賽をともない北京に赴いた。洪鈞50歳、賽金花24歳の時である。

洪鈞、字は陶士、文卿と号した。原籍は安徽歙州より移って蘇州呉県の人となる。道光19年（1840. 1. 12）生まれ。家は貧しかったが勉学を請い、賽の生まれた同治3年には挙人、同治7年（1868）30歳の時、首席（状元）で進士となり翰林院修撰に任ぜられる。孟樸と汪柳門の娘との結婚の媒酌をした呉大徵も同年の試験で進士となっている。同治9年（1870）提督湖北学政、光緒元年（1875）順天郷試同考官、同2年（1876）陝西郷試正考官、等を歴任し、光緒9年（1883）内閣学士兼礼部侍郎銜になると、母が年老いたのでその侍養のため一時職務を去ることを請い（開缺終養）認められ蘇州にもどる。翌10年（1884）母の死に遭遇し、賽を娶り喪があけるのを待って北京に行ったことは前述した通りである。北京に到着して間もなく光緒13年五月、ロシア・ドイツ・オーストリア・オランダ4国に出使する欽差大臣に任じられたが、正夫人は子女養育のため、第2夫人は病弱のため同行できず、第3夫人の賽が随行することになった。光緒16年（1890）召還されて帰国するまでの3年間、4国を歴訪し、洪鈞はその間元史研究にうちこみ、『元史訳文証補』（未完）を著わしたことは有名である。すでに兵部左侍郎に昇っていた洪鈞が、帰国後、総理各国事務衙門大臣を兼ねるといふ激務をこなしながら、一方で『元史訳文証補』の完成に全力を注いでいた時期に孟樸は出会ったことになる。孟樸と賽の知り合った翌光緒19年八月、洪鈞は病を得て55歳で急死している。³⁶⁾

光緒18年（1892）下半年、孟樸は南下帰郷するが、この頃、沈梅孫の8番目の娘香生との婚約が整っており、翌光緒19年（1893）春、2度目の結婚をした。

36) 洪鈞については、島田好「賽金花と洪鈞」上/下 『満蒙』第23年1月/2月号号 1942.1.1/2.1. “Eminent Chinese of the Ch'ing Period”の洪鈞の項等を参照した。

フランス語の学習

会試に失敗し、内閣中書の官位を買い、外国語を学ぶため同文館に入学するまでの孟樸の行動を年譜風に書くと次のようになる。

光緒18年(1892) 21歳 常熟——北京——常熟

北上入都。汪柳門宅に寄寓、趙劍秋、翁又申らとつきあう。

三月 会試に失敗、内閣中書の官位を買う。

洪鈞宅に出入し、賽金花に会う。

下半年 南下帰郷。沈梅村の8番目の娘香生と婚約。

光緒19年(1893) 22歳 常熟

春 沈香生と結婚。夫人と姑の関係がよくなく、孟樸は苦痛を感じる。

光緒20年(1894) 23歳 常熟——北京——常熟

春末 北京へ。翁同龢宅に出入する。

秋 祖母丁太夫人80歳の誕生を祝うため休暇をとり帰郷。

光緒21年(1895) 24歳 常熟——桃源——常熟——北京

春(三月?) 長男虚白生まれる。

家族で桃源県へ行き長期滞在する。

六月十五日 『補後漢書芸文志并考』全11巻完成。

秋 外国語を学習し外交官になるため北京の同文館特別班に入学、フランス語の基礎を8ヵ月間学ぶ。

光緒22年(1896) 25歳 北京——常熟——北京——常熟

三月二十八日 翁同龢に『補後漢書芸文志并考』を贈る。

春 次男耀仲生まれ南下帰郷、4、5ヵ月滞在。

七月二十七日 総理衙門の章京採用試験が行なわれるが「失敗」する。

八月一日 翁同龢にいとまごいをする。

南下帰郷後、父君表死す。

常熟——北京間を幾度となく往復できるほど内閣中書の仕事は暇なものであった。毎月、4、5回当番をすればそれで職責をはたしたことになったという。³⁷⁾

満州族が征服者となった清朝においては、被征服者である漢族との言語の相違（満州語と漢語）に配慮しなければならなかった。特に中央政府においては、満州の天子の下に満漢両系統の官僚を並立させた関係上、両者の意志疏通のための翻訳機関が必要となったのである。その翻訳機関として最も重要なのが内閣中書と各衙門筆帖式であった。ところが、時代が経るに従い、満州族に漢語が普及してしまい翻訳の必要がなくなった。同時に翻訳機関もまた無用の長物と化し、単なる遊閑官吏予備軍となったのである。³⁸⁾ 孟樸が内閣中書にありながら、北京と故郷常熟の間を行ったり来たり頻繁に出来たのも内閣中書ではほとんど仕事がなかったことが原因のひとつだった。

孟樸が南北を奔走せざるを得なかったもうひとつの原因は、2度目に結婚した沈香生と孟樸の母との関係がうまくいかなかったためであると私は考える。

「夫婦間の感情は異常³⁹⁾に融和したが」、香生夫人と姑間の感情はどうしようもなかった。「これはもともと一般大家庭では普通の難問題であるが、先生（注：孟樸のこと）は両者にはさまれて、異常な苦痛を感じた。彼は刺激を受けやすい天性で、意気さかんであるのに自由に伸せにくいとなると発憤してこの大家庭を飛び出す出口を求めたのであった。これが彼が中年以後、政治活動と社会事業に従事する最初の動機である」⁴⁰⁾と虚白は述べているが、孟樸中年以後といわず、すでにこの頃より大家庭の中に自らの身を置くことを避けているように思える。

光緒20年（1894）春末、北上入都し翁同龢宅に出入している。時あたかも日清戦争開始の直前であり、西太后・李鴻章（和議を主張）と光緒帝・翁同龢（開戦を主張）の対立があったが、師の意見そのままに孟樸は開戦を主張した。ま

37) 虚白「年譜」。『資料』159頁。

38) 宮崎市定「清朝における国語問題の一面」『東方史論叢』第一 1947. 7（未見）。『アジア史研究』第三 1957. 12. 25第1版／1975. 9. 30第2版所収。

39) 虚白「年譜」。『資料』157頁。ここの「異常」というのは原文中国語のままである。初婚の珊門との仲も「異常」によかったという個所もあり、虚白氏の書きクセであるかも知れない。

40) 同上。

た、父君表にも、倭を征つべし、という文章がある。⁴¹⁾

七月一日(1894.8.1)日本は清国に宣戦布告、日清戦争が始まる。

一旦官職を得ての北京滞在は、孟樸にとってそれほど心地よいものではなかったらしい。四方の俊才とつきあいましたが、官界に入ってしまうと内部から清朝の腐敗した政治の秘密とかが耳に入ってくるたびに腹いっぱい不満を感じ、ロクでもない官職など惜しいものかと思うのであった。祖母の80歳の誕生を祝うというのを口実に、南下郷した翌年(1895)、長男虚白が生まれる。その頃、夫人の兄・沈期仲が桃源県⁴²⁾に着任しており、招かれて孟樸夫妻は、日清戦争という社会の変動をよそに「桃源」境に遊ぶこととなった。この間、6年がかりの『補後漢書芸文志并考』全11巻を完成している。

光緒21年(1895)三月二十三日(4.17)、朝鮮の独立承認、遼東半島・台湾・澎湖列島の割譲、賠償金2億両支払い、等を内容とした日清講和条約(馬関条約)が調印された。その直後に、ドイツ・フランス・ロシアは遼東半島の清国への返還を日本に対して勧告する(三国干渉)など、あわただしい政治情況に刺激された孟樸は、桃源より常熟にもどり父と相談のうえ北上入都することにした。

虚白は、孟樸の同文館入学の動機を次のように説明している。

先生(注:孟樸)は、外国から受ける侮りが日にびに急になるのを見て、中国文化は古いものを取り除き更新する大改革がいちど必要であるとの時認識するに至った。さらには、古いしきたりにとじこもって進歩を求めようとしない者は国を救うに値しない、西洋文化を研究するのが時勢を正し、国を治めるかなめであると見極めた。だから、君表公とこのたびの上京を決め、外国語を学習すること、西洋文化の研究に努力することを決心

41) 曾之撰「征倭四宜三益説」阿英編『甲午中日戦争文学集』北京中華書局 1958. 7 所収。495—497頁。口絵に同文章の扉が掲げられているが発表年月日は不明。

42) 虚白は「年譜」で「蘇北の桃源県」といい、李培徳は「蘇北の南京に近い桃源と呼ばれる場所」と書いている。ただ、私の手元にある『中華析類分省図』(武昌亜新地学社 1929.7)等の大雑把な地図類では、桃源県といえば湖南省にあり、虚白、李培徳のいうものに該当する場所を捜し当てることができない。

し、また外交官が国のためにつとめる唯一の近道であると考えたのだった。⁴³⁾

中国文化を大改革するためには、外国語を学習し、西洋文化を研究する必要がある、というのはよく理解できる。しかし、それがすぐさま外交官になることに結びつく所に、孟樸あるいはその父君表の意図が明確に表われている。孟樸父子にとって重要なのは、正式の、つまり買官ではなく試験に合格して官僚になる事であったと思われるのだ。会試では、一時の気まぐれで藍榜に登せられる行為をしてしまった孟樸には、会試に合格して官僚になるという道はすでに閉ざされてしまっている。同文館から総理衙門に入ると言うのが、彼に残された「唯一」の道であり、「近道」でもあったと言うことが出来るだろう。

同年秋、孟樸は上京し翁又萊の紹介で同文館の法文館（フランス語）に入学する。法文館の学生は孟樸と張隠南の二人だけであった。英文館には澎子嘉（谷孫）、潘経士（盛年）、翁又申（焜孫）の三人がいた。

同文館は、西洋の言語・文字・学術を教授し、通訳官・翻訳官を養成する目的で総理衙門の附属機関として、同治元年（1862）にまず英文館が設立された。最初、学生定員は各館10名、入学年齢15歳前後、すべて八旗の子弟でなければならなかった。同治2年（1863）、法文館と俄文館（ロシア語、本来は俄羅斯文館として1757年に成立していたのが、同文館設立に際して吸収されたもの）が併置される。同治6年（1867）には保守派官僚の猛反対を押し切って西洋の天文学・算学を教授する算学館が加設されたが、これを機に満漢人民の20歳以上の進士・挙人および五品以下の年長官員と対象学生の範囲が拡大され、それにともない学生定員は100名に、1887年には120名にまで増員された。また、学生の中で漢族の占める割合は徐々に増加して行き、光緒5年（1878）の約20%から光緒14年（1888）約40%、光緒19年（1893）53%さらに光緒24年（1898）には79%まで到達したという。⁴⁴⁾ 同治11年（1872）徳文館（ドイツ語）、光緒22年（1896）には東文館（日本語）が増設されている。修業年限は8年、卒業後

43) 虚白「年譜」。『資料』158頁。

44) 百分率は李培徳による。41頁。

は総理衙門で翻訳に従事したり、通訳官として使節に随行したり、外交官になつたりする道がひらけていた。⁴⁵⁾

しかし、孟樸が同文館特別班で実際に経験したのはそうバラ色のものばかりではなかった。虚白は「年譜」の中で、フランス語は旗人の世益三（増）が教授していたが、教課の規定では毎日33字（語のことか？）を学び、翌日はそれを暗誦してから新字（語？）に移る、教授法もなく担当の教官は官職に就くだけで教えず、役所の仕事をやって一種の資格を得ようと考えているだけだったし、また、学生の方も同文館に入学することを総理衙門に入る手段と考え、研究学問をするという誠意など誰にもなかった、教官・学生ともに感興が尽き、みないい加減につじつまを合わせて責を逃れるだけだった、⁴⁶⁾とポロクソに言っている。だが、動機からだけ言えば孟樸も同類ではなかったか。孟樸が英語ではなくフランス語を選択した理由は、英語は通商貿易の用に足るだけだがフランス語は外交折衝に必要な言葉だからだ、故に、決意を持っていた孟樸だけが他の学生とは違いフランス語の基礎を打ちかためることが出来た、という意味のことを虚白は言うのだが、はたして、そうか。外交官になることとフランス語を学習することが当初から結びついていたのだろうか、という疑問である。つまり、同文館入学——外交官として総理衙門へ、というコースを考えていたとはいえ、別にフランス語でなくてもよかったのではないか、孟樸がフランス語を学習することになったのは偶然であったとも言えるのではないか、ということだ。当時の模様を孟樸自身の言葉で聞いてみよう。

私がフランス語を学び始めたのは、光緒乙未年（注：1895）——中日戦争（注：日清戦争）が終わったばかりの頃——の秋でした。当時、張樵野が総理衙門にいて同文館に特別班を設けるよう主張し、各部院の官員をもつぱら選び、国学の基礎のある者に外国語を学習させるよう、英・独・

45) 同文館については以下のものによった。畢乃徳著／傳任敢訳「同文館考」、吳宜易「京師同文館略史」ともに張静廬輯註『中国近代出版史料二編』（上海群聯出版社1954。5）所収。中村哲夫「科挙体制の崩壊」『講座中国近現代史』第3巻東京大学出版会1978。6.20所収。

46) 虚白「年譜」。『資料』159頁。

仏・日の4班に分けたのですが、私はちょうどフランス語班に分配されたのです。このやり方は元々はいいものなのです、たとえ目的が何人かの高等翻訳官を養成するためにだけあったとしてもです。ところが、これら選ばれた特別班の学生は、堂々たる高等官でなければ評判の下士といった具合で、仕事も忙しければ鼻息も荒く、机にかじりついて小学生のマネがどうして出来ましようか。毎日、学校へ出ると、役所に出勤するのと同じに、しばらく腰をかけお茶を一杯、雑談をして、上官が人才を育成しようとする熱意に対していかげんにあしらうこととしたのでした。外国人教授もしかたがなく教室で毎日、一人芝居を演じ、ひとり帰って行くというありさまです。後には、まったく演じるのも嫌になり、いっそのこと来なくなりましたし、学生も来たりこなかつたりでした。この特別班もいつの間にか消滅し、前後、全部で8ヵ月持ちましたか。

孟樸自ら、フランス語班には「分配」されたと明言している。虚白は、後の孟樸とフランス文学の強い結びつきを見るうちに、孟樸のフランス語を初めからの必然的、意図的選択であったと考えてしまったのだ。

上記引用文で注意を引くもうひとつの事柄は、同文館の特別班ということだ。8ヵ月で自然消滅するところから見ても正規8ヵ年の課程ではない事がうかがわれる。特別班についての詳細は今のところ不明であるため、なぜ孟樸が正規課程に入学しなかったのか、その理由を明らかにすることが出来ないし、また、フランス語班の学生は、虚白の言うように本当に孟樸と張隠南の二人だけだったのかもわからない。

外交官になりたくて同文館に入学、フランス語特別班に偶然とはいえ分配された孟樸ひとりが外国語学習を放棄しなかったのには、彼の性格・好みが影響していた。興味が感じられると何事にもすぐ熱中してしまうという性格に加えて、ちょうど同文館に入学する直前に『補後漢書芸文志并考』全11巻を完成したという事情もあった。大事をなした後の、次の目標としてフランス語学習が

47) 孟樸の胡適之あて公開私信。『真美善』第1巻第12号。1928. 4. 16。

意識されたのではないか。最初の目的である外交官は協道に追いやられ、熱中の方向が手段であった外国語学習そのものに移転してしまったと考えるのは容易なことだ。そうでなければ、特別班解散後、外交官になる望みも断ち切られて、教師もなくなつた一人で文法を無理矢理おぼえ、字典を記憶するといった無味乾燥な仕事を3年も続けられるはずがない。

光緒22年(1896)春、次男耀仲が生まれたという祝電を受け取り、南下帰郷、4、5ヵ月滞在の後、総理衙門の試験に応じる気持ちを捨てきれず、またまた上京している。

総理衙門の試験の主査は張樵野(蔭桓)であり、翁同龢とはもともと不和の関係だったが、孟樸が日頃から翁宅に出入りしていたため恨みを孟樸に転化させ、それで孟樸は落第してしまった、と虚白は試験の顛末を述べている。更には、張樵野は孟樸にむかって、「君が総理衙門に入りたいのなら受験するにはおよばない、私が君を推薦してあげるよ」と言い、この籠絡しようとする言葉を卑しんだ孟樸は、憤然と袖を払って去った、⁴⁸⁾とも記述しているが、どうも事実は虚白の言う通りではなさそうだ。

虚白は、孟樸が実際に受験しその結果落第したと書いているのだが、実は、受験するために必要な推薦を得られなかった、つまり、いわば門前払いをくわせられたのが本当のところらしい。徐一士によると当時、総理衙門章京(注:定員は滿漢各10名)の採用には、内閣侍読・中書、各部の郎中・員外郎・主事のなかから、役所の推薦を受けた者を総理衙門の長官が集まって試験をする制度になっていた。⁴⁹⁾

その時の試験は、翁同龢と張樵野等が責任者となって行なわれたが、翁の日記に孟樸とこの試験に関連する次のような記述が見られる。

丙申(光緒22年)三月二十八日 曾孟樸より補漢書文芸志考10巻を贈られ

48) 虚白「年譜」。『資料』160頁。

49) 徐一士「説『曾孟樸先生年譜』」(二)『国聞週報』第12巻第42期 1935.10.28 所収。『清末小説研究』第2号で、私は該文を「第42期を見てもみあたらない」と書いたが、目次にないだけでよくよくページをくってみたら、たしかに掲載されていた。ここに訂正をしておく。

る。彼は年齢わずかに25歳であるが、著書はゆきとどいており、異才である。

七月二十六日（張）樵野を待つも来たらず。彼に策題を作るようにといったのだが、明日は総理衙門章京の試験である。内閣は満漢各30名を推薦しているが、曾孟樸は選出されていない、張映南（注：張隱南）はうしろの方に推薦されている。

七月二十七日 策題を作り樵野を訪れる。ともに相談して決め、彼の所でそれを書き、食事をする。食事を終わり二人で役所に行くのと9時だった。麟公はまだ来ておらず、敬・溥両君は先に集まっている。麟公が来るのを待って、点呼、答案配布、問題発表するとすでに11時30分である。（後略）

八月一日 曾孟樸いとまごいに来る。総理衙門章京に推薦されるを得ず、怒って袖を払い帰ってしまう。食物を送る。⁵⁰⁾

翁同龢より『補後漢書芸文志并考』の著者は「異才である」との評価を受けている点が注目される。だが、どういう理由からか孟樸は受験に必要な内閣からの推薦を得られなかった。「門前払い」という所以である。

孟樸にとって、正式な官僚となる道は完全になくなったと考えるべきである。すぐさま荷物をまとめ、永定河の出水をもかまわず天津めざして出発した。天津に至る道中、山賊と知り合った事情をことこまかく虚白は「年譜」に記している。

父 親 の 死

故郷にもどってしばらくしないうちに父君表が中風をわずらい病の床に伏してしまった。⁵¹⁾ 以下は、虚白の「年譜」から。

50) 『翁文恭公日記』25) に同じ。同上にも引用収録されている。『資料』191—192頁。

51) 魏紹昌氏は『資料』で、虚白「年譜」の君表公の死を「七月」と訂正している。初出には、七月とは明記されておらず、たぶん氏には何らかの根拠があるであろうが、孟樸は八月一日、翁にいとまごいをしているので、帰郷ののち父の発病ということだから七月というのはおかしくなる。

先生と君表公は、父子の間にもともと特別な情感を持っていた。君表公の性情はなごやかで、その才気の縦横する一人息子に対してとりわけ十万分に大切にしていたし、ふだんに小さなことまでにも気を配るのは、まったく慈母に異ならなかった。書齋において、切磋琢磨はもはや父子間の分際を忘れてしまい、形と影が分離しがたいような良友に変わっていた。孟樸先生はこの大きな事故に会うと、棺を撫で慟哭し、何度気を失ったかわからなかった。彼の生まれつき誠実な性質の発露とはいえ、実に、君表公が一生彼を愛護して至れりつくせりであったとも受け取れるのである。⁵²⁾

小さい頃から自宅で孟樸の勉学を見てきたのは父親である。Tとの恋愛に敗れ、自暴自棄になっていたのを北京に呼び出されてからというもの、父親は唯一最大の保護者として孟樸には意識され、以後は何かにつけて父親の言うがままではなかったか、と想像するのだ。

たとえば、孟樸19歳の時の童試受験と同時の汪珊門との結婚、翌年20歳の時の郷試受験、珊門を失い気のすすまなまま21歳で会試を受験したのも父親の強い勧めがあったからだ。内閣中書の官位を買ってくれたのも父、二度目の結婚も、同文館に入学したのも父親と相談した結果である。

17歳から25歳までの青年期を、孟樸は父親の手厚い庇護のもとに過した。換言するならば、何ら自分の意志で生活を切り開こうとはしなかったし、またその必要も彼には意識されなかったのである。この頃、わずかにフランス語学習という目標を設定しつつあったが、父親の死後のある時期、糸の切れた凧的行動を取るのもまた事実なのであった。

(たるもと てるお)

52) 虚白「年譜」。『資料』161頁。